

---

# 千年の絆

弥招 栄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千年の絆

### 【Zコード】

Z3210B

### 【作者名】

弥招 栄

### 【あらすじ】

何度生まれ変わっても、必ずお前を見つけて見せる。そう誓った男は、女とともに炎の中に消えた。そして千年後、その誓いは果たされたかに見えた。しかし……ソレデモアナタハ……

そのとき俺は、炎の中にいた。

腕の中に女子<sup>おな</sup>を掻き抱き、のどを刺す煙に咽びながら、轟と啼く熱気に顔を灼きながら、劫火の向こうへと抜ける道を探していた。

「おのれっ！ 木曾の山猿めがつ！」

たとえその呪詛が矢となりて、彼奴の喉元<sup>さやつ</sup>に刺さりうとも、我が館を嘗め尽くさんとする炎から抜け出す<sup>すべ</sup>術はない。

いや、この程度の炎など、焼けるまでに駆け抜ければどうということはない。このような華奢な女子一人抱えたとて、たかだか二、三丈。熱いと言わぬ間に、抜けてみせる。

しかし館の周りには、夜討ち焼き討ちをかけてきたむつけ<sup>もつけ</sup>武士<sup>ものふ</sup>どもが、いまだ鬨<sup>とき</sup>の声を上げている。炎の轟きの狭間から、その蛮声が聞こえる。

たとえ抜けえたところで、俺はもううん殺されよう。しかしこの娘は。

京の女子の柔い肌など知らぬ山猿どもがどのような蛮行に及ぶか、考えるまでもない。

腕に力を込めればさらにも力を込めてすがりつき返してくる。それがあおさら愛おしい。

たとえ指一本たりとも、彼奴らに触れさせるものか。

灼熱をはらんだ煙が叩きつけられる。しかし、俺の肩に伝わる彼女の涙のほうが、よほど熱い。

赫<sup>あか</sup>く光る火の粉が、むき出しのせなに、うでに、降りそそぐ。しかし、俺に必死にしがみつき、恐れに震える彼女の指のほうが、よほど痛い。

「よいか、忘れるな！」

俺は、彼女の耳元で叫んだ。

金赤の照り返しで飾られた黒髪が、わずかに擡げられた。  
「千の刻が過ぎようとも、決してお前を忘れはせぬ」

屋根が抜けたのか、濃くなる一方だった煙が渦を巻き、一瞬晴れた。白粉が涙と汗で流れてしまつても、その愛らしさに変わりはない。

「よいか、忘れるな」

煙に燻されてもまだ艶やかな濡れ色の目を見つめながら、ちらりと口を開く。

「万の輪廻を経ようとも、必ずお前を見つけてみせる」

天へと昇る煙の後を追うように、炎が吹き付けてきた。彼女は声にならぬ悲鳴を上げて、俺の胸に顔をしつづめる。俺の下で何度も乱れさせてきたねばたまの髪が、ちりちりと音を立てて燃える。

「よいかつ、忘れるなーっ！」

焼け崩れた梁が、俺の上に……

俺は一瞬の幻夢から突然醒めた。それに陥ったときと同様に。友人らしき女と、笑いざめている彼女を一目見た瞬間。俺はすべてを思い出していた。

(見つけた……)

思い出したのは、炎に巻かれた記憶だけではない。

幾度も、幾度も、彼女と巡り合うことなく、無為に繰り返されてきた転生の記憶。

ただ、生きるために必死だった今生の記憶だけではなく、ただ、生きて死ぬるだけだったそれらの記憶ですら、今この瞬間のためにあつたのだとすれば、決して無駄ではない。

(やつと会えた)

濡れ羽色だつた髪は、亞麻色に染め替えられていた。眉墨だけは

刷<sup>は</sup>いているようだが、白粉も叩かず、鉄漿<sup>おはぐる</sup>も差してはいない。

しかし、そのようなものは、どうでもよいことだ。俺は、彼女の殻を愛したわけではない。火に焼ければ、焦げて失われてしまう身體など。

俺が愛したのは、彼女の魂。

だからこそ、いかに見<sup>み</sup>目<sup>め</sup>が変わろうとも、ひとめで彼女が“彼女”だとわかったのだ。

しかし俺は、すぐに彼女に近づいたりしなかつた。

彼女も、俺と同じく、俺の魂を愛してくれたのだと信じている。

しかし

万の転生を繰り返した記憶が、死すらも恐れぬ俺の心を、臆病にさせる。

彼女は本当に彼女なのか。いや、それは間違いない。この俺自身の魂に懸けて、断言できる。

彼女は、俺を、俺だと、気づいてくれるだろうか……

それでも俺は、彼女に近づかずにはいられなかつた。ゆっくりと、ゆっくりと。

そのとき、俺の気配を感じ取つてくれたのだろうか、彼女が俺の方に振り向いた。

これだけは変わらない、濡れ色の瞳。それが俺と目のあつた瞬間、大きく見開かれた。

歓喜が、俺の身体を震わせる。やはり、気づいてくれた。ついに、千年前の誓いは果たされた。

彼女は立ち上がり

「ギャ  
！！ ばかミホッ、あんた何してんのよーっ！」

+

あたしは思わず悲鳴を上げた。

「何つて、ゴ」

「ばかばかっ、それ、めっちゃお気このスリッパなのこい」

右手にスリッパを掴んだままフローリングの床に四つんばいになつているミホに、あたしはスリッパの片割れを投げつけた。

ミホの両親が旅行でいなくて不安だから泊まりにきてくれつていから、それできてやつたのに。

何でよりによつて、あたしの一一番のお氣に入りのムートンのスリッパであるなこと……

「じめんつて、返すわよ」

全然悪びれた様子のないミホは、そつとスリッパを持ち上げると、顔をしかめた。

「うわあ、さすがムートン、すごい威力だわ」

「な……なによ」

「……みる?」

「ぜーつたに嫌つ!」

もう泣きそうだ。何でこの部屋

「何でこんなに出んのよーつ!？」

二人で漫画を読んでれば、かさかさ。

お菓子をつまんでれば、わさわわ。

久しぶりのお泊り会だから、下ろしたてのパジャマも持つてきただのに、着替えようと思つたらその中からも。

「だいたい、何であんたはそんなに平氣な顔をしてんのつ?」

ミホは床に寝つこうがついているときに、目の前をそいつが通りか

かつても、びくともしない。信じられない。絶対にこいつは女子じゃない。

「このマンション、一階が居酒屋じゃない。換気口かなにかが繋がつてゐるよねえ。いくらやつつけども、すぐこわいて出るから、慣れちゃった」

そう言つておきひくに笑うミホの背後の壁にも、また一匹。

「もう嫌だ。あたし帰るからね」

「大丈夫だつて。あんたがあんまり騒ぐから一匹やつつけちゃつたけど、こいつら、案外きれい好きなんだよ。いつも身づくろいしてゐるし。それによく見たら、結構かわゆい……」

「かわいくなーいつ！」

何でこいつはあんなものの肩を持つてんのよ。ぱつかじやないの？ こいつら、てかてかしてるし、しゃかしゃかすばやいし、飛び。最悪だよ。大体、かわゆいつて言つた口と、叩き潰した右手の持ち主が同じつて、どうじうこと？

……あれ？

「ねえ、ミホ」

「ん？ なに？」

何がおもしろいのか、うわあと眉を顰めながらスリッパの下を覗き込んでいたミホが、顔を上げた。亞麻色の髪が、揺れる。

「あんた、何で泣いてるの？」

「え？」

呆気にとられたミホの顔を、彼女自身の指が撫でる。中指の先を濡らすのは、まぎれもない、涙。

ミホはただ、それをじつと見つめていた。

「……ミホ？」

「あれ？ なんでだろ。別に、悲しいわけじゃないのに……」

そう言つて微笑む頬を、流れ続ける、涙。

「へんだねー」

変なのは、あんたのほうよ、そう言いかけて、あたしは自分の目をこすつた。

ミホに重なつて、黒い髪の、きれいな着物を着た女人人が見えた気がした。

「あ、スリッパ。ちゃんと洗つて返すからね」

「つりん、いいの……？ うきや ！？」

ぱおつとした隙に手渡されたものを見て、あたしは再び悲鳴を上

げた。

あたしのお気にのスリッパの裏にへばりつく

「ばかミホ ！」

「だって、いいって言つたじゃない」

「いらないって言つたの！ もう帰るわ……」

### (ナレーション)

一人をつなぐ赤い絆は、幾星霜経よつとも、途切れることはない。  
だが、手繻り寄せたと思えば、また離れ、近づいたと思えば、す  
れ違う。

糸を見るこの叶わぬ、人の身なれば。

あなたの傍にいる“それ”は、前世で契つた魂の器かもしけない。  
それでもあなたは、

バルサンたきますか？

(fin)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3210b/>

---

千年の絆

2010年10月8日13時46分発行